

一九九八年八月初め、北京大學南門横の「風入松」書店で、『政治中国』の出版を祝うサイン会が開かれた。その日、「風入松」には、中国の政治的民主の新たな展開を願う人々の熱気が充満していた。現代化百年の特集を、戊戌変法の歴史的検討という文脈から、現代中国の政治体制改革の全体的考察にまで拡大するというアイデアが、このとき芽生えた。帰国後、『政治中国』の編者の一人が逮捕され、書物自体も発禁になると聞くに及び、自分のアイデアを中途で放棄することはできないという想いをより強くした。

それにしても、北京滞在中に『現代化の陥穽』の著者、何清漣女史が北京に來られていたのは幸いであった。長身で細身の彼女は少し強い湖南アクセントで、党幹部の汚職腐敗の実態や中国現代化の構造的矛盾について、熱っぽく語ってくれた。その対談は、北京オリンピック村「ローマ花園」のとあるマンションで行われた。彼女は党関係の仕事で北京に來たと言ひ、この部屋も党中央がセットしてくれたとだけ述べたが、八月初旬という時期から見て、党の紀律委員会が指揮する汚職取締りの仕事ではなかったかと思う。

八月一日には、党中央・國務院・解放軍の連名による、軍隊と武裝警察、政法機關のビ

ジネス禁止キャンペーンが始まったばかりであった。北京の庶民はどこでもこの決定に大喜びだった。党中央が「現代化の陥穽」の党批判の言辞に耳を傾け、彼女の助力を必要とし始めたことは、党にとつても国家にとつても良いことには違ひなかつた。

改革開放以後の新語を集めるのにも苦勞した。現代は春秋戰國期、漢代、魏晉南北朝、唐代、五四運動期、文化大革命期に次ぐ新語出現のピークに当たる。たんに語彙が豊富になつただけではなく、「很中国」とか「愛你、没商量」といった従来の中国語のシンタックスからすれば誤用に近い言い回しも数多く登場し、新しい表現法として定着した。ただ今回はそれらは割愛して、政治經濟關係の新語を重点的に収集してある。ハロルド・ブルームなら「誤読の地図」(Map of misreading)と呼ぶであろう、この魅力的な研究テーマは今後も追求してゆきたい。

特集内容の変更に伴ひ、予告とはずいぶん様変わりした内容となつたことを、読者にお詫びしなければならぬ。許紀霖(上海師範大學)、溫樂群(中國人民大學)のお二人との討論は今後の紙面で実現することを約束したい。最も残念だったのは、中国トロツキストの大長老、鄭超麟の死であった。現代化百年を特集するにあたり、中國革命と現代化の關係について、その節を貫いた生き様から感

得されたお話を聞きたかつた。九八年七月末にインタビュウのアポをとつていたが、七月半ばにお電話すると、もう絶望的だという答えであつた。そして八月一日の死。享年九七歳。中國共產黨の創始者、陳独秀に最後まで忠誠を尽くした美しい生涯であつた。幸ひ、長堀さんが杭州の魯迅紀念館を訪ねる途中、上海に立ち寄られるというので、鄭老のご遺族に鄭老をめぐることも尋ねて頂くようお願いできた。これも美しい文章である。(緒形 康)

愛知大學現代中國學部 <http://china.atch-u.ac.jp>

## 中国21 Vol. 5

一九九九年三月二〇日発行

編集 愛知大學現代中國學會  
発行 愛知縣西加茂郡三好町黒笹三七〇

電話(〇五六二)三六一二二一

発売 風 媒 社

名古屋市中区上前津二一九一四

電話(〇五二三三三)一〇〇〇八

印刷 印刷 (株) あ る む

名古屋市中区千代田三一一二二  
電話(〇五二三三三)二〇八六一